

古文教材としての「大鏡」の可能性について

風間 重利

一、はじめに

これまでの古文授業では、ややもすると語法的な知識の習得を目的とした個々の作品の読解に重点を置く傾向があった。その反面、各作品同士の関係やそれらが成立してくる歴史・社会的背景への配慮が軽視されがちであった。その方面は、日本史の授業に任せてしまえばよいという風潮があったように思う。そういうわけで、作品読解と作品や作者を取り巻く社会状況に対する認識とが、ばらばらな形で生徒の頭のなかに存在するという状態になりがちであった。ことばによって成り立っている文学世界も、その背景となっている時代やそれを創造した作者が生きていた社会と無関係ではありえない。そこには非常に緊密な相関関係が、望むと望まずとに関わらず存在しているはずである。そして、その相関関係を読み取る行為にこそ、古文を読む醍醐味があるように思われる。このような醍醐味の無い授業では、どうしても授業が単調になり、語法的な知識を記憶することばかりが強調されてしまうため、生徒が古文に拒絶反応を起こしてしまうことがよくあった。古文の授業が教材の読解にとどまるのではなく、その作品や作者を取り巻いていた時代・社会を感じることが出来る深さを持てば、生徒の古文に対する態度も変わってくるのではないかと思う。そして、そのような授業を実施しや

すい教材の開発が是非とも必要であろうと思われる。この小論においては以上のような観点をもととした古文教材開発のひとつの試みとして、平成四年度第一学期に本校二年生で実施した授業の内容を紹介することとする。

二、『大鏡』の教材としての面白さ

古文の授業ではさまざまな時代の作品を読み進んでいくことになるが、やはりその中心となるのは平安朝とよばれる時代の文学作品群である。それは例を挙げれば『竹取物語』、『古今和歌集』、『土佐日記』、『伊勢物語』、『大和物語』、『蜻蛉日記』、『枕草子』、『和泉式部日記』、『源氏物語』、『紫式部日記』、『更級日記』、『今昔物語集』などである。それらの作品群によって描き出されている文学世界を、それぞれ孤立したものとして扱うよりは、それぞれの作品や作者を取り巻く社会状況、政治的な問題、人物関係を通史的に感じ取りながら、それらの作品群をなんらかの形で関連づけて読みすすめることができれば、生徒の古文理解の意欲を高めるのに有益であろうと思われる。本校での二年間の授業を通

して、そのような試みをするに最適な教材は、平安朝後期に成立したと言われる歴史物語『大鏡』であると思うようになった。その理由は、この作品が文徳天皇の嘉祥三年（八五〇年）から後一条天皇の万寿二年（一〇二五年）にいたる歴史を『史記』に倣って紀伝体で記していることにある。この歴史物語が記す時代のなかに、既に記した高等学校で扱う平安朝の文学作品群の殆どが含まれており、尚且つこの作品の作者が、それらの作品もしくは作者、その作品に登場する人物について積極的とも言えるほど言及しているのである。また、その歴史を紀伝体という人物中心の記述法で描きだしているため、そこに登場する人々が実に生き生きと感じ取られる作品となっている。その人物の描写には、当時興隆してきた『今昔物語集』を代表とする説話文学に通ずる力強さがあり、生徒の興味・関心を呼び起こすには非常にすぐれた教材となる可能性がある。

しかし、これまでの古文授業では『大鏡』を教材として取り上げる場合、他の古文教材と殆ど関係づけられず、そのみを単独で扱って来た。『大鏡』という作品は、他の古典教材に比して異例とも言うべき政治性の強い複雑な権力闘争を作品の主題に持っているため、ある特定の部分を単独に扱った場合には、窮屈な時間のなかで、その記述の背景に絡む複雑な人物関係、政治的事情の説明ばかりが多くなってしまう、肝腎の作品の面白さを感じさせるところまでなかなか行けないという欠点があったように思う。そこで、私はこの作品を単独、部分で扱うのではなく平安朝の文学作品群を歴史的・有機的に結びつける一つの縦糸として、充分な時間をかけてこの作品を取り上げたいと考えた。

三、教育実践（その①）

授業第一時限と第三時限までは『大鏡』の「序」を読み進めながら、この物語の語りの趣向について生徒に理解させることに重点を置いた。そのため、以下のような物語の語られた場、話し手の紹介、話の主要な目的などに関わる記述部分には特に注目させた。

・ さいつ頃、雲林院の菩提講にまゐりてはべりしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人おうなと行きあひて、同じ所にあぬめり。

・ （繁樹）おのれは故太政大臣の大臣貞信公の藏人の少将と申しし折の小舎人童大丸ぞかし。主はその御時の母后の宮の御方の召しつかひ、高名の大宅の世継とぞいひはべりしかな。

・ （繁樹）太政大臣殿にて元服つかまつりし時、（忠平）「きむちが姓は何ぞ」と、仰せられしかば、「夏山となむ申す」と申ししを、やがて繁樹となむつけさせたまへりし。

・ 年三十ばかりなる生侍めきたるもの、せちに近く寄りて、（侍）「いで、いと興あることいふ老者たちかな。さらにこそ信ぜられね」

・ （世継）さらにもあらず。一百九十歳にぞ、今年はなりはべりぬる。されば繁樹は百八十に及びにてさぶらふらめど、やさしく申すなり。おのれは水尾のみかどのおりおはします年の正月の望の日生れてはべれば、十三代にあひたてまつりてはべるなり。

・ (世継) まめやかに世継が申さむと思ふ事は、ことごとかは。ただ今の入道殿下の御有様の、世にすぐれておはしますことを、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、数多の帝王、后、また大臣、公卿の御上をつづくべきなり。

・ (世継) 世を数へれば、そのみかど(文徳天皇)位につかせたまふ嘉祥三年庚午の年より、今年まで一百七十六年ばかりにやなりぬらむ。

以上のような記述をもとに、この歴史物語が後一条天皇が在位していた万寿二年(一〇二五年)京の紫野の雲林院の菩提講に参詣した大宅世継という一九〇歳の老翁が、偶然に出会った昔なじみの一八〇歳の夏山繁樹と、雲林院での説教を聞きに集まった善男善女の前で藤原道長の栄華に関わる昔話をし、それに若侍が加わって展開するという作品の趣向を理解させた。

ただし、本文を読むだけではその趣向を理解することがやや困難なので、生徒には本校で採用している国語便覧中の「皇室・藤原氏系図」や「年表」などの資料を参考にさせながら授業を進めた。資料を見ているうちに、世継と繁樹の年齢の記述が矛盾していることに気づく生徒もいて、単調になっていた授業に活気が出た。作品の趣向を理解させるという一応の目的をはたした後、「皇室・藤原氏系図」を参考にしながら、藤原氏による外戚政治の仕組み(権力掌握の仕組み)を視覚的に理解させ、これ以後の物語の主題(外戚政治に絡む権力闘争)を説明した。

また、古文理解に不可欠な暦法は一年時に既習した事項であるが、歴史物語を読む上で常必要とされる知識なので、「序」を読み進むなかで出てきた以下に示すようなことばを便覧を利用しながらこ

の機会に復習した。

・ 正月の望の日生まれてはべれば(陰暦月曆表・・・望月、十六夜月など)

・ 丙申の年にはべり

(干支に関しての理解。年月、時刻、方角との関係について。音訓ともに読めるように。)

・ 嘉祥三年庚午の年

また、『方丈記』(安元の大火)の記事を読ませて、習得した知識を実践的に利用させた。

四、教育実践 (その②)

授業第四時限〜第九時限までは『大鏡』の帝紀のうちの「五十五代 文徳天皇」、「五十六代 清和天皇」、「五十七代 陽成天皇」を読みすすめながら、『伊勢物語』の世界の背景にある摂関政治確立期の社会的状況を理解させ、生徒が『伊勢物語』を読む一つの動機づけとなるように心がけた。この部分は、『大鏡』中でも無味乾燥とも言える歴代天皇の履歴を記述したところで、これまでの古文の授業では、全く取り上げられなかったところであるが、十世紀初頭に成立したといわれる『伊勢物語』と関連づけながら読むことによって意外な生彩を放つ教材になる。

この教材を取り上げるにあたって、まずは以下のような『大鏡』の帝紀・摂関列伝に共通する冒頭の記述部分に注目させ、その意味を考えさせた。

「五十五代 文徳天皇」

・ 文徳天皇と申しけるみかどは、仁明天皇の御第一の皇子なり。御母は太皇太后宮藤原順子と申しき。その後左大臣贈正一位太政大臣冬嗣のおとどの御女なり。

「五十六代 清和天皇」

・ 次のみかど清和天皇と申しけり。文徳天皇の御第四の皇子なり。御母は皇太后宮明子と申しき。太政大臣良房のおとどの御女なり。

「五十七代 陽成天皇」

・ 次のみかど、陽成天皇と申しき。これ清和天皇の第一の皇子なり。御母皇太后宮高子と申しき。権中納言贈正一位太政大臣長良の御女なり。

以上のような帝紀の冒頭部分に共通することは、主要な登場人物を記述する場合に、必ず最初にその血筋（父母及び母方の祖父）が記されるという事実である。血筋を物語ることが歴史を物語ることにならないということ、特にこの物語の舞台となっている時代においては、帝の母方の祖父が誰であるかが決定的な問題であったことを、「皇室・藤原氏系図」を見せながら、生徒に感じ取らせた。次いで、個々の帝紀を読みながら、『伊勢物語』に関わる以下のような記述に注意させた。

「五十五代 文徳天皇」

・ これ（藤原順子）を五条后と申す。伊勢物語に業平中将の、

「よひよひごとにうちもねななん」とよみたまひけるは、この宮の御事なり。「春やむかしの」なども。

「五十六代 清和天皇」

・ このみかど（清和天皇）は、御心いつくしく、御かたちめでたくぞおはしましける。惟喬親王の東宮あらそひしたまひけんも、この御事とこそおぼゆれ。

「五十七代 陽成天皇」

・ この后宮（高子）の、みやづかひしそめ給ひけんやうこそ、おぼつかなけれ。いまだよもりておはしける時、在中將しのびてゐてかくしたてまつりたりけるを、御せうとの君達、基経の大臣・国経の大納言などのわかくおはしけん程の事なりけむかし、とりかへしにおはしたりけるをり、「つまもこもれり、われもこもれり」とよみたまひたるは、この御事なれば、すゑのよに、「神よの事も」とは申しいでたまひけるぞかし。されば、よのつねの御かしづきにては御覧じそめられたまはずやおはしましけんとぞ、おぼえはべる。もし、はなれぬ御なかにて、染殿宮（明子）にまゐりかよいなどしたまひけむほどのことにとぞ、をしはかられ侍る。およばぬみに、かようの事をさへ申すは、いとかたじけなき事なれど、是はみな人のしろしめしたる事なれば。いかなる人かは、このごろ、古今・伊勢物語などおぼえさせたまはぬはあらんずる。「みもせぬ人の恋しきは」など申すことも、この御なからひのほどとこそはうけたまはれすゑのよまでかきおき給ひけむ、おそろしきすきものなりかしな。いかに、むかしは、なかなか、けしきある事も、おかし

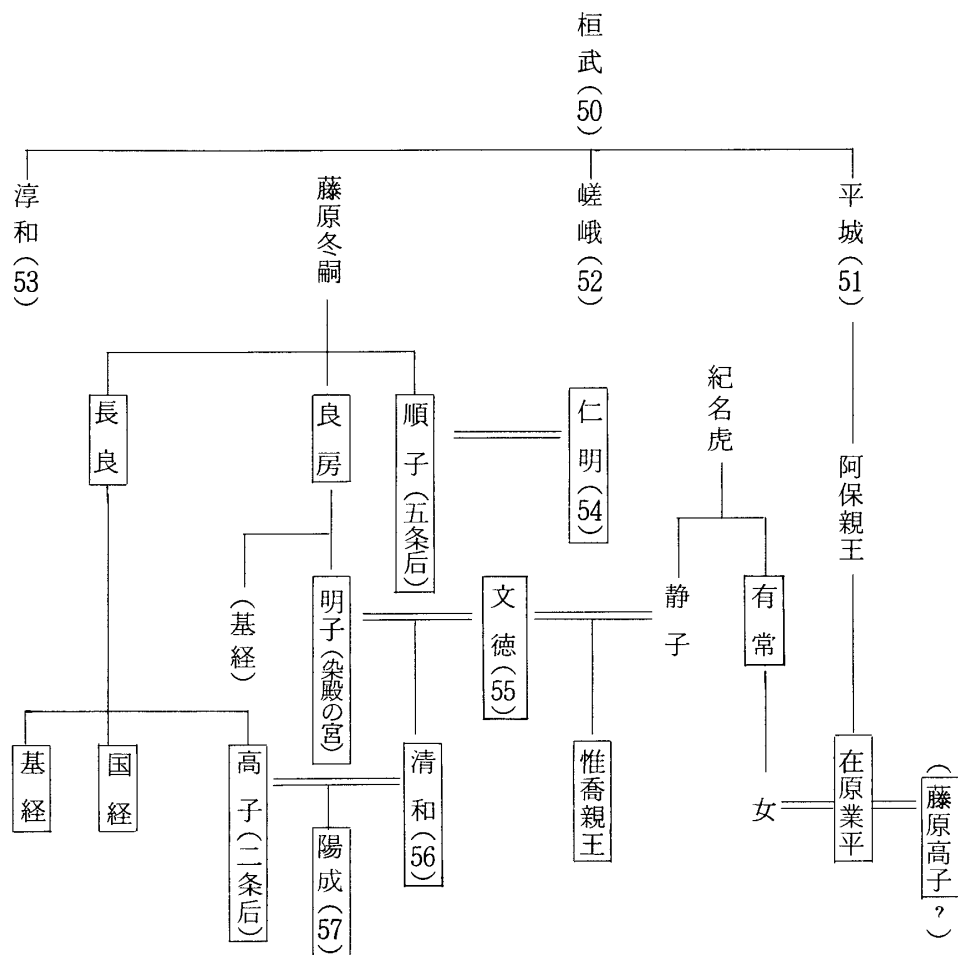
き事もありけるものとて、うちわらふけしきことになりて、いとやさしげなり。二条のきさい（高子）と申すは、この御事なり。

以上の引用文を注意深く読むことによって、清和帝が立太子するにあたり藤原氏により惟喬親王という皇子が排除された事件に注目させた。また、後に清和帝の後になった藤原高子と在原業平の駆け落ち事件があったらしいことにも注目させた。そして、引用文で登場した人物を、「皇室・藤原氏系図」をもとに黒板に以下のように記すことで、この二人の人物（惟喬親王と在原業平）をつなぐ役割をした紀氏の存在に気づかせ、この二つの事件が藤原北家による他氏（在原氏・紀氏）排斥の過程で起こっていることを理解させた。そのような本文読解の過程を通じて、それらの事件を作品の背景にもつ『伊勢物語』への関心を高めることに努めた。

以上のような授業と関連づけて『伊勢物語』を教材に取り上げるならば、これまで以上の深さで『伊勢物語』を読み進めることが可能となるであろう。このような『大鏡』（帝紀）の読解を前提として、授業では『伊勢物語』の第四、第五、第六段（むかし男と二条の後の物語）、第八十二、第八十三段（右の馬の頭と惟喬親王の物語）を特に第四、第五、第六段では以下のような記事に注目させながら読ませた。

「第四段」

・ むかし、東の五条に大后の宮（順子）おはしましける、西の対に住む人（高子）ありけり。それを、本意にはあらで、心ざ



し深かりける人、行きとぶらひけるを、睦月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しと思ひつつなむありける。

「第五段」

・ むかし、男ありけり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。

「第六段」

・ むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに來けり。

以上、引用文に下線を引いた部分も、『大鏡』を読んだ後では、非常に説得力を持って生徒に伝わるように思われる。摂関政治の最前線に立ち後宮政策に狂奔している藤原氏の娘を、紀氏を通じて文徳天皇の第一皇子惟喬親王と深く関わり藤原氏と結果的に対立関係にある在原業平が好んで愛するはずがない、という前提を理解している生徒にとっては、この二人の恋愛事件を物語化した章段が、非常に純粋な恋物語として心に響いてくるだろう。

また第八十二、第八十三段（右の馬の頭と惟喬親王の物語）では以下のような記事に注目させながら読ませた。

「第八十二段」

・ むかし、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。その時、右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。

・ 親王のたまひける、「交野を狩りて、天の河のほとりにいたるを題にて、歌よみて盃はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭、よみて奉りける、

狩り暮らしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは來にけり

親王、歌をかへすがへす誦じたまうて、返しえたまはず。紀の有常、御供に仕うまつれり。それが返し、

一年にひとたび來ます君待てば宿かす人もあらじと思ふ

歸りて、宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み、物語りしてあるじの親王、酔ひて入りたまひなんとす。十一日の月も隠れなむとすれば、かの馬の頭のよめる、

飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ

親王にかはり奉りて、紀の有常、

おしなべて峰も平らになりなむ山の端なくは月も入らじを

「第八十三段」

かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほか、御髪おろし給うてけり。睦月に、をがみ奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば雪いと高し。しひて御室にまうでてをがみ奉るに、つれづれといとものがなくしておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思へどおほやけごとどもありければえさぶらはで、夕暮れに帰るとて、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見むとは

とてなむ、泣く泣く来にける。

『大鏡』の学習を前提にすれば、引用文に下線を引いた部分から惟喬親王を中心とした右の馬の頭、紀有常の非常に親密な関係を読み取ること、摂関政治の権力闘争のなかで敗れた惟喬親王が失意のうちに出家したことに對する馬の頭の深い悲しみと同情を読み取らせることが容易になると思われる。また、このような読みを通じて『伊勢物語』では、権威や権力から排除された人々（政治的な敗者）のみやびやかな行いを記述することに作品の主題が置かれていることを感じ取らせることに努めた。そのような認識を導きだすのに適当な章段なども紹介しながら、『伊勢物語』を自主的に読むことを勧めた。ここまでの授業での生徒の反応は予想以上であった。授業では意図的に教材自身の注釈はそれほど深く行なわず、それぞれの興味にあわせて復習しておくように指導した。『伊勢物語』を生徒に自主的に読ます機会となったのではないかと思う。

また、この『伊勢物語』第八十二、第八十三段に描かれたような右の馬の頭と惟喬親王関係の記述は、紀貫之の書いた『土佐日記』の一月八日と二月九日の記述にも見られるということを紹介し、その内容のあらましを説明した上で家庭での自主学習を促した。そして、次頁のような紀貫之に関わる系図を板書しながら、貫之が有常や業平、惟喬親王と同時代を生き、面識があつた可能性もあることを指摘した。その上で紀貫之が自ら所属する紀氏の栄光の歴史を著述の中に書き残した必然性を考えさせた。

『土佐日記』（一月八日）

・ 八日。障ることありて、なほ同じ所なり。今夜、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。もし、海辺にてよましかば、「波立ち障へて入れずもあらなむ」とも、よみてましや。

『土佐日記』（二月九日）

・ かくて、船曳き上るに、渚の院といふ所を見つつゆく。その院、昔を思ひやりて見ればおもしろかりける所なり。後なる岡には、松の木どもあり、中の庭には、梅の花咲けり。ここに、人々のいはく、「これ、昔、名高く聞こえたる所なり」、「故惟喬の親王の御供に、故在原の業平の中將の、

世の中に絶えて桜の咲かざらば春のころはのどけからまし

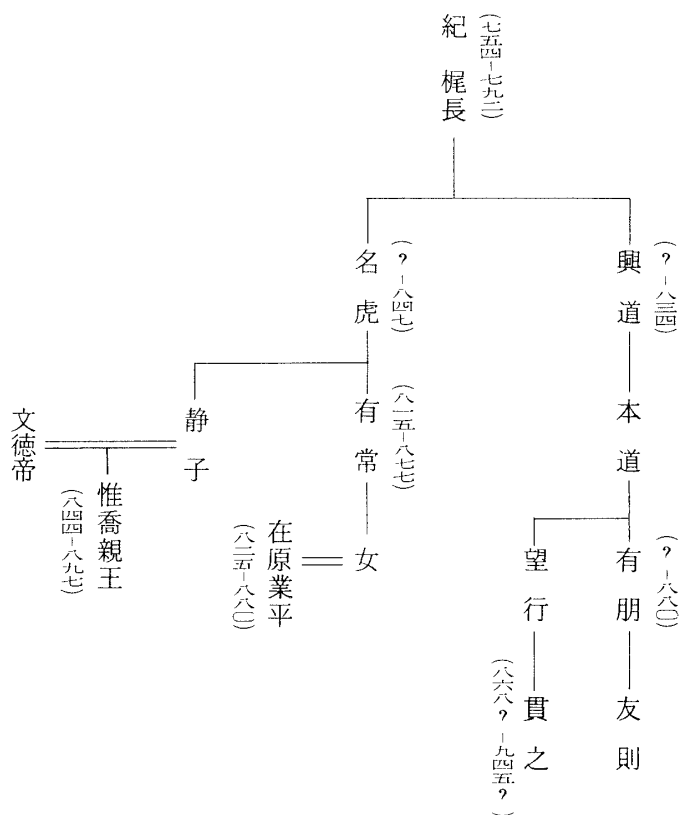
といふ歌よめる所なりけり」。いま、今日在る人、所に似たる

歌よめり。

千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変らざりけり

また、ある人のよめる、

君恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞなほ匂ひける



また、清和天皇擁立の裏側で行なわれた藤原北家による紀氏や在原氏の排除という事件以上に、この時代で忘れてはならない大事件は貞観八年（八六六年）に起こった応天門の炎上事件であろう。この事件によって、藤原北家と権力を二分していた時の左大臣源信は政界から事実上引退し、大納言伴善男が放火の首謀者として捕らえられ、その一族が遠流されることになる。この時、藤原良房は、藤原氏として初めて正式に摂政の地位にいたった。

しかし、この事件に関しては『大鏡』には何も記されていない。授業では、生徒にこの時代の雰囲気を感じ取るために、説話教材を使用しこの事件への接近を図った。この事件を扱った説話資料としてもっとも著名で古いものは『伴大納言絵詞』であろう。また、『宇治拾遺物語』にも同様な記述があり、その後日談は『今昔物語集』にも見いだされる。授業では『伊勢物語』を読んだ後、前に上げた作品中より伴大納言を扱った『宇治拾遺物語』（四 伴大納言事、一四四 伴大納言焼応天門事）をプリントし読み進めながら、この時代における「夢」のもつ呪術的な意味や結局だがこの事件で一番利益を得たことになるのかを考えさせた。特に「伴大納言焼応天門事」を読みながら、『伴大納言絵詞』の写真を話の筋にしたがって順次教壇で生徒に見せていったところ、非常に積極的な反応が生徒に現われたことは新鮮な驚きであり、視覚教材としての絵巻の可能性を考えさせられた。

また、『今昔物語集』（巻第二七 或所膳部、見善雄伴大納言霊語第一一）をプリントし政治の中枢から排除されて無念のうちに死んでいった人物の末路が、説話ではどのように描かれているかに注目させた。特に、伴大納言が死後成仏する事なく、行疫流行神（疫病神）として世界をさまよい疫病を振り撒くという後日談にはこの時代の社会思想を読み解く鍵が隠されていると考えられる。しかし、ここではこの部分の社会思想的な意味にまでは触れず、そのような

後日談が在るという程度にとどめた。

五、教育実践（その③）

授業第一〇時限と第一四時限までは『大鏡』の帝紀「五十八代光孝天皇」、「五十九代 宇多天皇」及び撰関列伝「太政大臣基経」を読み進めながら、特に以下のような記述に注目し、光孝天皇擁立の異例さ、作品に描かれた皇位継承に絡む源融と源定省（宇多天皇）とに対する藤原基経の態度の矛盾を発見させることで、皇位継承問題が藤原北家の強力な政治力に左右されていた当時の政治的状況を感じ取らせることに、前半の指導の重点を置いた。

「五十八代 光孝天皇」

- ・ つぎのみかど、光孝天皇と申しき。仁明天皇第三皇子なり。御母、贈皇太后宮藤原沢子贈太政大臣総継御女なり。
- ・ 位につき給ふ、御年五十五。世をしらせ給ふ事、四年。小松の帝と申す。

「太政大臣基経」

- ・ このおとどは、長良の中納言の三郎におはす。このおとどの御女、醍醐の御時の后、朱雀院並びに村上二代の御母后におはします。このおとどの御母、贈太政大臣総継の女、贈正一位大

夫人乙春なり。陽成院位につかせ給ひて、摂政宣旨かぶりたまふ、御年四十一。寛平御時、仁和三年十一月二十一日、関白にならせ給ふ。

- ・ 小松の帝の御母、この殿の御母のはらからにおはします。さて、ちごより小松の帝をば親しく見奉らせたまひて、「事に触れ警策におはします。あはれ君かな」と、見奉らせたまひけるが、

- ・ 陽成院おりさせたまふべき陣の定にさぶらはせたまふ。融のおとど、左大臣にてやむごとなくて、位につかせたまはむ御心深く、「いかがは。近き皇胤をたづねば、融らもはべるは」といひ出でたまへるを、この大臣こそ、「皇胤なれど、姓たまはりて、ただ人にてつかへて、位につきたるためしやある」と申し出でたまへれば、さもある事なれど、この大臣のさだめによりて、小松の帝は位につかせたまへるなり。

「五十九代 宇多天皇」

- ・ 次帝、亭子のみかどと申しき。これ、小松の天皇の御第三皇子。御母、皇太后宮班子女王と申しき。二品式部卿贈一品太政大臣仲野親王御女なり。この帝、貞観九年丁亥五月五日生まれさせ給ふ。元慶八年四月十三日、源氏になり給ふ。御年十八。仁和三年丁未八月二十六日に、春宮にたたせ給ひて、やがて同日に、位につかせたまふ、御年二十一。

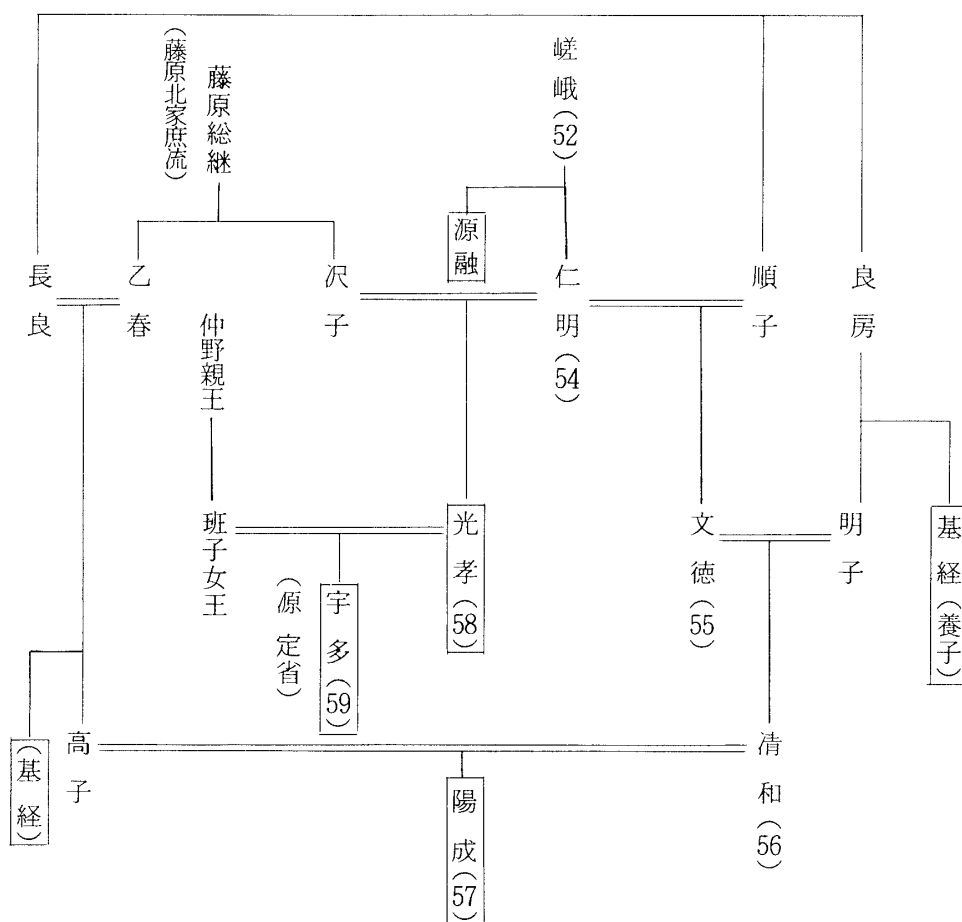
- ・ この帝のただ人になり給ふほどなどおぼつかなし。よくもお

陽成帝在位當時、藤原基経は帝の叔父として摂政となり權勢並びなき地位を掌握していた。その基経が、自らの手によつて陽成帝を退位に追い込み、藤原摂関家の外戚政治にとつて殆ど無縁（祖父総経は北家庶流に過ぎない）であつた、當時既に五〇歳を優に超えた老境の時康親王（光孝天皇）を担ぎだしていることは如何にも異様な事態であることを後に記す系図を板書しながら強調して、其の事情に關してのいくつかの事項を説明しながらその謎に興味を抱かせた。

また、時康親王を担ぎだすときの私的な動機と、源融を皇位繼承権争いから排除するときの過去の事例をもととする公の論理との間にある不統一さを全く問題としない藤原基経の態度に注目させることで、藤原北家の皇位繼承問題に対する極めて私的で強力な政治力を理解させるようにした。

以上のような観点を裏付ける事実として、「太政大臣基経」中の基経の源融を排除することは「皇胤なれど、姓たまはりて、ただ人にてつかへて、位につきたるためしやある」と、彼が光孝帝の後に擁立した宇多帝の履歴（一度賜姓源氏となっている）の矛盾に生徒自身が気づくように指導した。ここまで読みすすめると、この時代の政治が私的な家（藤原摂関家）の論理によつて動かされていたというところが、生徒に実感できるものと思う。このような指導を通じて

て、古文を読むことが、それが記述された時代の雰囲気を理解することに繋がることを実感させた。



『大鏡』においては、これらの事件は事実として扱われているのみで、この事実に対する世継の評価は示されていない。しかし、事実を事実として指摘してある点にこそ、この作品の持つ批評性がある。

と思われる。その隠された批評性を、生徒の発見（源融と源定省との差異）を通じて明らかにしていく所にこの授業の面白さが有ったように思う。

この授業の後半の主題としては、先に取り上げた「伴大納言善男」の後日談とも絡ませながら、藤原摂関家を中心とする政治体制の中から排除されていた者たちの末路がどのように物語世界のなかで記述されていくか、またそのことにはどのような社会的思想が反映されているかの問題を取り上げた。そのような主題を考えるために、授業では、左大臣源融の死後の後日談を記した『今昔物語集』の一章段（巻第二七 河原院融左大臣霊宇陀院見給語第二）をプリントして生徒に読ませた。

今はむかし、河原院は、融の左大臣の造り住み給ひける家なり。陸奥の国のしほがまの形を造りて、潮の水を汲み入れて、池に湛えたりけり。様々にめでたくをかしき事の限りを造りて住み給ひけるを、その大臣失せてのちは、その子孫にて有りける人の、宇多の院に奉りたりけるなり。しかれば、宇多の院、その河原の院に住ませ給ひける時、醍醐の天皇は御子おはしませば、度々行幸有りてめでたかりけり。

さて院のすませ給ひける時に、夜半ばかりに、西の対の塗ごめを開けて、人のそよめきて参る気色の有りければ、院見遣らせ給ひけるに、ひの装束うるはしくしたる人の、太刀はき、しやく取り、畏まりて、二間ばかりのきて居たりけるを、院、「あれは何人ぞ」と問はせ給ひければ、「この家の主に候ふ翁なり」と申しければ、院、「融の大臣か」と問はせ給ひければ、「さに候ふ」と申すに、院、「それはなんぞ」と問はせ給へば、

「家に候へば住み候ふに、かくおはしませば、かたじけなく所せく思ひ給ふるなり。いかが仕るべき」と申せば、院「それはいと異やうの事なり。我は人の家をやは押し取りて居たる。

大臣の子孫の得させたればこそ住め。ものの霊なりといへども、事の理をも知らず、いかでかくはいふぞ」と、高やかに仰せ給ひければ、霊かき消つやうに失せにけり。其の後また現はるる事無かりけり。

その時の人、この事を聞きて、院をぞ忝く申しける、「猶、ただ人には似させ給はざりけり。この大臣の霊にあひてかやうにすぐやかに異人はえ答へじかし」とぞいひける、となむ語り伝へたるとや。

以上のような、源融の死霊が河原院に御幸した宇多院の前に現われるという説話は、その同文同話が「宇治拾遺物語」（一五一 河原院融公霊住事）、「古本説話集」（上の二七）にも存在し、また、本話の異伝は、「江談抄」（三の三二）、「古事談」（一の七）に存在する。このような事実から、この手の話が一時広く世上の口の端にのぼったことがうかがわれる。河原院がこの時代、源融の霊を中心とする霊鬼の巢窟のように説話世界で取り上げられていくのは単なる偶然ではない。それは、前に取り上げた伴大納言善男の死後の後日談を思い出しても想像されることであろう。

藤原摂関政治の中で政治の表舞台から排除された反摂関家勢力や社会の底辺で時の政治の犠牲となつて喘いでいる名もない庶民の社会批判が、絶対的な摂関家の権力の前に屈折した形で怨霊信仰にはけ口を求めていくという図式が存在していたらしいことを感じ取らせるように注意しながら授業を進めた。

この怨霊信仰が特に天災・人災と結びついてた時に、権力者たち

の罪の意識を含んだ怯えを導きだし、もっとも反権力的な力を発揮するという図式は、次の教材である「左大臣時平」における菅原道真の扱われ方において頂点に達する。貞観五年（八六三年）に行なわれた神泉苑御霊会の目的も、当時猛威をふるった咳逆病（流行性感冒）を鎮静化するため、桓武朝の早良皇太子をはじめとする藤原北家によって謀反人として誅殺・追放された人々の御霊を国家の手によって慰霊する事であった。

以上のような授業を実施した後、「五十九代 宇多天皇」中の以下の記述を利用しながら代表的な歌物語である『大和物語』を生徒に紹介し、自主的な読書を勧めた。

昌泰元年戊午四月十日、御出家せさせたまふ。肥前承良利殿上に候ひける、入道して修行の御ともにも、これのみぞつかふまつりける。されば、くまのにても、ひねといふところにて、「たびねのゆめにみえつるは」ともよむぞかし。人々のなみだおとすも、ことほりにあはれなることよな。

『大和物語』（第二段）

帝、おりみ給ひてまたのとしのあき、御ぐしおろし給ひて、ところどころ山ぶみし給ひておこなひたまひけり。備前の丞にて橘良利といひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければやがて御ともにかしらおろししてけり。人にもしられたまはでありき給ひける御ともに、これなむおくれたてまつらでさぶらひける。「かかる御ありきしたまふ、いとあしきことなり」とて、うちより「少将、中将、

これかれ、さぶらへ」とてたてまつれたまひけれど、たがひつつありきたまふ。和泉のくににいたりたまうて、日根といふところにおはします夜あり。いとところぼそうかすかにておはします事を思ひつつかたかなしかりけり。さて、「ひねといふ事をうたによめ」とおほせ事ありければ、この良利大徳、

ふるさとのたびねのゆめに見えつるはうらみやすらむ又とはねば

とありけるに、みな人泣きてえよまずなりにけり。その名をなん寛蓮大徳といひてのちまでさぶらひける。

『大和物語』の第二段を読んだあと、この章段と先に学習した『伊勢物語』第九段東下りの章段との物語の構造及び和歌を比較させ、その類似性を見いださせ、都から地方へと旅する都会人の「旅のこころ」の描かれ方に類型があるのではないかと指摘した。また特に和歌における「夢」の取り上げ方の特徴を小野小町の和歌などを板書して確認した。（これは、一学年で既に学習した事項）

また、寛蓮大徳と宇多院が、金の枕を賭けて碁を打つ『今昔物語集』巻第二四第六をプリントし、ユーモラスな事件をもとに親しく描かれている二人の関係を読み取らせた。

六、教育実践（その④）

授業第一五時限と第一七時限では『大鏡』の撰関列伝「左大臣時平」を教材に取り上げた。授業の前半では、以下に引用する文を注意深く読み取ることを通じて、藤原摂関家とは全く無関係である菅

原氏出身の道真が、一時的ではあれ、権力の中枢に身を置くことができた事情及びその没落の事情を理解させることに重点を置いた。

・ このおとどは、基経のおとどの太郎なり。御母、四品彈正尹人康親王の御女なり。醍醐の帝の御時、この大臣、左大臣の位にて、年いと若くておはします。菅原の大臣は右大臣の位にておはします。そのをり、帝御年いと若くおはします。左右の大臣に、世の政行ふべき宣旨下さしめたまへりしに、そのをり左大臣御年二十八九ばかりなり。右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけむ。ともに世の政をせしめたまひしあひだ、右大臣は才世に勝れ、めでたくおはしまし、御心おきても、ことのほかにかしこくおはしまし、左大臣は御年もわかく、才もことのほかに劣りたまへるによりて、右大臣の御おぼえことのほかにおはしましたるに、左大臣安からず思したる程に、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬ事出でて、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて、流されたまふ。

藤原氏の大黒柱であつた基経が、寛平三年（八九一年）に世を去つて後、宇多天皇は代わりの関白を任命しようとしなかつた。その宇多天皇に重用された学者上がりの文人菅原道真の建言により遣唐使が廃された事件（寛平六年・八九四年）は余りにも有名である。上に引用した「左大臣時平」冒頭部の記述は、宇多天皇が譲位し、その皇太子敦仁親王が一三才で即位するところから始まっている。醍醐天皇即位後の昌泰二年（八九九年）に左大臣、右大臣として就任したのは経験浅い二〇代の若者であつた藤原時平と学識も深く経験も豊富で思慮分別にすぐれた五〇代の菅原道真であつた。「左大

臣時平」伝のこのような人物比較は必然的に若き醍醐天皇の信望が道真に偏らざるをえないことを暗示している。菅原氏という政治の世界における傍流出身の道真が、政治家として頂点に立つためには人並み優れた能力（才）が不可欠であつたことは想像に難くない。しかしまた、そのような人並み優れた能力と身に余る出世・幸運は、摂関家の氏の長者左大臣時平にとつて苦々しいものであつたにちがいない。また、道真の榮華は藤原摂関家の繁榮の影で逼塞している他氏の羨望・嫉妬的にならざるをえなかつたことも引用文から容易に想像させることが可能であらうと思われた。

また、「才」という単語には注目させて、それが「漢才」（漢詩文の学識）を意味することを理解させ、そのことばと対応することばとして「魂」「大和魂」（勇氣、機転、人生の知恵）ということばがある事を辞書を使って調べさせた。このことばは、「左大臣時平」の後半部における『大鏡』作者の時平評価に直接的に関係してくるが、今回は授業時数の制約よりそれには深く触れなかつた。

菅原道真が太宰府に流されていく記述部分や太宰府での生活が記述されている箇所は、『北野天神縁起絵巻』をその都度、教壇上で紹介しながら解説した。

教材中の道真の漢詩を説明する時には、彼の著述である漢詩文集『菅家文草』『菅家後集』が図書室などで簡単に借りだせることや以下に引用するような部分に注目させて、この時代の貴族の漢詩文へ関心の高さを強調した。

・ 筑紫におはします所の御門、かためておはします。大式の居所は遙かなれども、楼の上の瓦などの心にもあらず御覧じやられけるに、又いと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の声をきこしめして、作らせたまへる詩ぞかし。

都府樓 纔看瓦色 觀音寺 只聽
鐘聲

これは文集の白居易の、「遺愛寺鐘字欵枕聽、香炉峰雪撥簾看」といふ詩に、勝さまに作らしめたまへりところ、昔の博士ども申しけれ。

右に引用した文中の道真の詩は、『菅家後集』に載っている「不出門」の額聯部にあたる。また、白居易の詩は『白氏文集』巻第一六「香炉峰下新卜山居、草堂初成、偶題東壁、五首」中の一首の額聯部にあたる。白居易のこの詩は、藤原公任撰の和漢朗詠集（一〇一三年）にも引用部分が掲載されており、平安朝の貴族社会の中では非常によく知られていた詩の一節であり、貴族としての基礎的な教養のひとつであったと想像される。そのような事情を、明らかにする資料として授業では『枕草子』の以下に引用する有名な章段をプリントして生徒に配り、家で読んでおくように指導した。

・雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。人々も「みなさる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさるべきなめり」と言ふ。

次に、道真が筑紫で亡くなった（延喜三年・九〇三年）後の記述

を読み進めていくなかで、以下のような引用部分に特に注目させながら、当時の道真の怨霊信仰の深刻さを生徒に感じ取らせるように努めた。

・やがてかしこにてうせたまへる、夜のうちに、この北野にこれらの松を生したまひて、わたり住みたまふをこそは、ただ今の北野の宮と申して、あら人神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめさせたまふ。いとかしこくあがめ奉りたまふめり。

怨霊信仰が、政情不安を呼び起こし時の政権をも脅かすような大きな力を持つてしまった場合には、朝廷もそれを無視することができない。この例は、先にも触れた朝廷主催の神泉苑御霊会（貞観五年・八九六年）と同様であろう。このような事態に対しては、その怨霊を慰める法要を朝廷主催で行なったり、それでも不十分なときにはその霊を神格化し、朝廷自身がそれを崇めることで、もともと怨霊信仰が持つていた反権力的な力を権力機構のなかに取り込んでしまおうとする権力者側の努力がうかがわれる。

それでは、道真の怨霊がなしたと思われる祟りとして『大鏡』ではどのような事項が上げられているだろうか。そこに注目しながら記述されている事項を記述順で以下のように板書し、それが起こった年代を記入していった。

・円融天皇時代の内裏火災後の修理に絡む事件・・・円融天皇在位期間（九六九年～九八四年）

・左大臣時平が三三歳で死去・・・九〇九年

・左大臣時平の娘褒子（宇多帝女御）の死去・・・不明

・左大臣時平の孫の東宮・慶頼王（文彦太子の御子）が五歳で死去・・・九二五年

・左大臣時平の長男八条大将保忠が四七歳で死去・・・九三六年

・左大臣時平の息子敦忠が三八歳で死去・・・九四三年

・左大臣時平の娘仁善子（東宮・慶頼王の母）の死去・・・不明

・左大臣時平の女貴子が五九歳で死去・・・九六二年

以上のように書き出してみると、『大鏡』に記述してある道真の祟りには、二つの方向が見いだされることがわかる。ひとつは、自らを政治的に葬った藤原時平に向けられたもの、いまひとつは、朝廷そのものに向けられた祟りである。天神信仰を決定的なものにしたものは、おそらくその後者であろうと思われる。内裏炎上や皇太子の死去という事件と道真の怨霊信仰が結合したことが、この時代の社会不安を増幅したことは容易に想像できるように思う。道真の怨霊信仰がいかに強烈であったかは、道真の死後半世紀以上を経た円融帝の時代に至っても、まだその怨霊が忘れられていなかったことからも明らかであろう。このような信仰の裏面にあるものは、藤原摂関体制のもとで没落していった勢力や、その政治の下で犠牲を強いられていた庶民の鬱積した怨念であったように思われる。

授業を通して、生徒には「左大臣時平」に描かれる「北野の御歎き」を、単に物語の読解としてではなく、その物語の背景となった社会への想像力を発揮しながら感じ取らせることに努めた。

七、おわりに

古文と言えば、文法や語彙の指導を通じて教材を現代語に訳していくこと、つまり解釈が授業の主な内容となることは、どうにも避けようのない現実なのだが、ある時、生徒の一人から「先生の教えていることは全部参考書に書いてあるよ」と言われたことは衝撃だった。「参考書にあまり書いてないことで、授業が組み立てられないか」と言う単純な発想から、今回の授業の試みが始まった。ひとつひとつの古典作品を単独で取り上げることが、いつもやっていることで新鮮さに欠ける。そこで、あるまとまった時代・社会において発生してきた諸作品を色々多様な見方で関連づけながら読んでみてはどうかと思った。そして、授業では可能ながざり細々とした文法や語彙の指導を避け、大掴みに多くの作品に触れさせながら、各作品世界の背景にある現実の社会や作者が生きていた時代の雰囲気を感じ取らせることに指導の重点を置いて、この試みを実施した。

約二十時間の授業のなかで、取り扱った教材は、『大鏡』を始めとして『方丈記』、『伊勢物語』、『土佐日記』、『宇治拾遺物語』、『今昔物語集』、『大和物語』、『枕草子』（『伴大納言絵詞』、『北野天神縁起絵巻』）などであった。当然、授業ではこれらの作品のごく僅かにしか触れていないが、その都度、それらの作品の簡単な解説を行いながら興味があれば自主的に読むように勧めた。古文の時間といっても週に二回しかないわけだから、全てを授業でまかなうことは不可能である。結局、授業の大きな目的の一つは、生

徒に古文に対する関心を持たせ続け、自主的に古文に向かおうとする姿勢を大切に育てていくことであろうと思う。そういう意味では、この試みはある程度効果があったように思う。

しかし、今回の試みは、事前に十分な準備を行ない綿密な授業計画を立てて実施したわけではなく、短時間に実施方法だけを決めて、実際の授業はその都度その都度、生徒が興味を示したところで寄り道（他の作品との関わりを探る）しながら進んだことも多々有ったので、一部行き当たりばったりになり、全体の時間配分で、頭でっかちになったり、尻すぼみになったりしたところがあつたことは否めない。また、学力的に余裕の有るものには全体的に好評であつたが、基礎的な部分に不安を持つ生徒にとっては、大量のプリントをこなしていくという点で苛酷で不親切なものとなつた。当然、予想していたことだが、興味ばかりが先立ち、基礎的な部分が見落とされがちになつたことも問題点として出てきたように思う。ただし、これは二学期以降の授業のやり方次第で補うことができる欠点なのでそれほど問題にはしていない。

このような授業形態は、相当地に生徒が古文の基礎知識を持っていないと上滑りで終わってしまう恐れがあると思うので、実施するとすればその時期を選ぶのに十分な注意が必要であろうと思われる。